〈コメント〉

誰のためのエコロジーか

藤原辰史

ここでは細部に分け入っていくよりも，それぞれの発表に通底する異分野横断的なテーマを提示することでコメントに変えさせていただきたい。それはつぎの４点，すなわち，環境をめぐる学問のあり方について，環境運動と環境政策を駆り立てた精神史的起原について，「成長」について，そして，経済格差とエコロジーについてである。

1　いかに環境問題を研究するか——日本ドイツ学会への提案

発表を聞きながら，一つの造語を思い浮かべた。「理系ドイツ」という言葉である。今年（2010年）の５月に北海道大学で開催された現代台湾学会で科学と植民地主義に関するセッションに参加したとき，中国科学史の飯島渉氏がつぎのようなことをいっておられた。「『理系アジア』とでもいうべき膨大なフロンティアがアジアの歴史に残されている」。私にはこの言葉はとても印象的だった。アジアの医学史を研究されてきた研究者だからこそ重みがあるのだが，いわゆる理科系の学者たちが植民地においてどのようなふるまいをしてきたのかについて調べずに政治家や文化系の学者だけの言説を追っていては歴史の全体像に大きな空洞が生まれてしまう，という警告だと私には思われた。

こんなことは，何十年もまえから，いや戦争中からずっと言われてきたことであるから，いまさらこの場で繰り返す必要はないかもしれない。けれども，たとえば，「科学大国」でもあったドイツが本国およびその植民地や占領地で実践してきた物理学，化学，生物学，農学，林学といった学問の歴史の包括的な研究は，まだ始まったばかりであり，たとえばドイツ文学の研究者とドイツ生物学の研究者の対話，ドイツ思想史とドイツ農学の対話など，さまざまな分野の研究者が集うこの学会においてこそ，もっと頻繁になされてしかるべきだろう。林学の歴史を再審することは，近世の木材危機やナチ時代の「森林官」ゲーリングの森林保護をはじめとしてすでになされてはいるものの，林学固有の問題としてもう一度近世なりナチ時代なりをとらえなおすことはまだ本格的になされていない。後者に関しては，森林をテーマにした「血と土の文学」を論じることもあるいは必要かもしれない。

いわゆる環境学のなかにも，環境政策論，環境法，環境史，環境倫理学，環境経済学というさまざまな分野がすでにある。だが，今日お話しを聞いていて思ったのは（とくに坪郷氏の紹介にもあったブラント社会リベラル連立政権からはじまる「統合的環境政策」の評価をめぐっても），やはり統合的な学の営みがなければ，評価できない。異分野横断的な研究者が，環境学にもドイツ学にももっと必要である。しかも，水，土，林，光，空気，気候，放射能などの研究対象は，従来の学問の垣根をいとも簡単に超えていく。どれもとらえる有機的かつ複眼的な態度が，「理系ドイツ」を掘り起こしていくうえで求められている。

2　環境運動と環境政策の精神史的根源

これは一言でいうならば「不安」である。1962年に出版されたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』を「騒々しい」と論じたのは，イギリス文学者で小説家の遠藤徹氏である。遠藤氏は，この本のタイトルから想像されるような静寂さは，本書全体のイメージとかけ離れていると述べている(1)。カーソンの「自然は，沈黙した。うす気味悪い。鳥たちは，どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い，不吉な予感におびえた」という叙述からも，彼女の人の胸を落ちつかなくさせる終末論的イメージと，それに基づく人間破壊の強烈な危機意識は一目瞭然である。

小野報告が取り上げたナチズムの自然保護意識においても，この危機感が背後にある。一つは，文明の退廃の危機。ナチスの場合，これを人種の退廃とセットにすることで，自然保護運動は断種運動や健康増進運動とも接点を持つ。二つめは，この報告で何度も指摘されたアルヴィン・ザイフェルトの「ステップ化」への危機感。この背後には，1930年代に北米大陸を襲った「ダスト・ボール」という砂嵐がある。当時のニュース映画をみると，上空何メートルも高く舞い上がった砂の嵐が農村や都市を襲っている。車や家が砂で埋まってしまうような，この世の終わりのような光景である。これは，ジョン・スタインベックの小説『怒りの葡萄』（1939年）で主人公の農業労働者たちが西を目指して移動する背景になっている。この原因は，農地の表土の荒廃。トラクターを軸にする地力収奪農法が，大地に薄皮のように張り付いている表土を荒廃させ，さらさらの砂にしてしまったことが大きな理由の一つである。当時のドイツの農学の文献を読んでも，このアメリカの表土流出がドイツの近い未来の問題として繰り返し取り上げられる。ザイフェルトも接近した有機農業（シュタ

（1）　遠藤徹『ケミカル・メタモルフォーシス』（河出書房新社，2005年）。とくに第１章「『沈黙の春』の騒々しさ――もうひとつの読み方」を参照。

イナーのバイオダイナミック農法）が登場する背景の一つとしても，この「不安」を考える必要があるだろう。あるいは，鬼頭報告が挙げた土地倫理 land ethic の主唱者であるアルド・レオポルドも（ちなみに彼はナチ時代のドイツにわたり狩猟鳥獣管理について勉強をしている），このダスト・ボールに衝撃を受けた１人である(2)。ほかにも，戦後ドイツの環境意識を規定したものとして，ローマクラブのシミュレーション（『成長の限界』1972年），チェルノブイリの原発事故（1986年），ヨーロッパの「森の死」などが挙げられる。

ほとんどの人間は，何か衝撃的な事件が起こらなければ，（あるいは危機感に襲われなければ），未来のために行動しようとしない。しかし，これまた歴史が物語るように，宗教にせよ，思想にせよ，事件のみならず，人々の不安に訴えかけるような未来への警告が（あるいは終末観が），歴史を動かす一定の力を生みだす。鬼頭報告が環境倫理学は宗教ではない，というようなことを指摘していた。これには完全に同意するが，環境問題において宗教は依然として重要な位置を占めていることは事実である。環境運動において，それがどれほど力を持ち得たのか，あるいは持ち得なくなってきているのかについては，これからの検証を待たねばならない。社会生物学をうち立てたアリの専門家ウィルソンは，３年前に『創造 The Creation』（2007年）という本を出版し，日本でも翻訳された。生物多様性保護を主張する生物学者（つまりウィルソン）と聖書原理主義の牧師との虚構の対話を書いている。ウィルソンがまだ「学者」の服を脱ぎ切れてなく，どことなく理屈っぽいので，評判ほどには成功したとは私は思わないが，この挑戦自体は意味あることだったと思う。坪郷報告や長尾報告で指摘されたように，環境政策が，従来の世界観の包括的な改革を前提としている以上，こうした精神史的・文化史的アプローチも，今後，今回紹介された諸分野でもっと盛んになされるべきだろう。

3 「成長」とは何か？

これも，長尾報告と坪郷報告が紹介した「エコロジー的近代化論」，つまり「環境保護を通じて成長へ」という議論から考えた。すでにお２人が述べたように，「環境政策大国」ドイツは，「経済成長か自然保護か」という単純な二項対立ではなく，成長もエコロジーも両方追う方向へ舵を切った。実は，このシンポジウムを企画する段階では，「環境大国ドイツのジレンマ」というのがタ

(2) アルド・レオポルド（新島義昭訳）『野生のうたが聞こえる』（講談社学術文庫，1997年）。原典は，Aldo Leopold, *A sand county almanac : and sketches here and there*, Oxford University Press, 1949.

イトルだった。しかしこれはもはやドイツには当てはまらない，つぎの段階に進んでいるという指摘を受け，テーマ変更になったのだが，このことからも，この転換の内実が私を含めドイツを研究のフィールドとする研究者のあいだでも知られていないことが明らかである。もはや，環境を重視しない企業は国際競争を生き残れなくなってきた。国家は企業を監視し，環境負荷を極力減らしていく一方で，技術的イノベーションを活発化させ，低成長ではあれ，企業の成長を促す，というものである。長尾報告で紹介されたイェーニッケの「第三次産業革命論」は非常に魅力的だ。蒸気機関的な第一次産業革命，電力・化学・内燃機関による第二次産業革命，そして情報知識技術，電子工学，環境技術による第三次産業革命という歴史観である。第三次革命では，エネルギーのリサイクルが重要になってくる。

とはいえ，やはり「ジレンマ」はまだなお存在するのではないか。「エコロジー的近代化」というのは「一兎も追えず」という状況に陥らないのか，私には最後まで結論がでなかった。それは，経済成長もバブルも経験しないまま青春時代を過ごした世代の「成長」観のせいかもしれない。「ゼロ成長」でないと自然環境や人間の生命は保全できない，という私の固定観念は，この議論によって多少なりとも柔軟になった気がするが，やはり，この議論は，政治家と企業（とくに自動車業界）とのコネクションなどの問題も含め，もっと追っていく必要がある。とりわけ，歴史研究者は，自然環境破壊の問題にもっと敏感であってもいい。

4　誰のためのエコロジーか？

これは，まさに，昨年のドイツ学会のシンポジウム（「〈格差社会〉ドイツ？」）とつながってくる問題だが，坪郷報告や鬼頭報告が示唆したような問題，つまり「誰のための環境保護か」という問いは，やはり重要である。たとえば，鬼頭報告で紹介された安田章人氏の研究――「環境に優しい」と称するスポーツハンティングを売り出す観光企業が，結局「自然をコントロールできない」原住民の猟師たちを追い出したという事実には，この問題が凝縮されている(3)。（そして，こうした態度は，ナチスの景観イメージ，とくに占領地の景観イメージと重なってくる）。

今回のテーマは，ドイツがメインであり，国際会議でつねに問題となる先進国と開発途上国との不調和は周縁に置かれざるをえなかったのだが，環境保全

（3）　安田章人「『持続可能性』を問う――『持続可能な』野生動物保護管理の政治と倫理」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』（東京大学出版会，2009年）。

の主体も環境破壊の主体もすでに多様化しており，一国環境観では明らかに限界がある。全体を通して考えたのは，環境問題のみならず，それを考える学問自体も先進国のエゴに陥っていないか，スポーツハンティングの企業のような思考に陥っていないのか，そこに生きる人々の営みから遠く離れた「環境保護」がイメージされていないのか，たえず問い直すことが今後も求められるだろう。